様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　６月　２０日現在

機関番号：８４２０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１６０１０１７
研究課題名（和文）　来館者同士のコミュニケーションを誘発する展示見学補助ツールの実践的研究
研究課題名（英文）　Research on tools for visiting an exhibition to induce communication among visitors

研究代表者 黒岩　啓子（KEIKO KUROIWA）
滋賀県立琵琶湖博物館　特別研究員
研究者番号：70470185

研究成果の概要（和文）： 10 種類の試作版展示見学補助ツールを企画開発し、それらを実際にファミリー来館者に利用してもらうことで評価を行い、その調査結果を基に 8 種類の完成版展示見学補助ツールを開発し評価した。これらを通じて、展示室における「人と展示物」、「人と人」とのコミュニケーションの相互作用においてツールが果たす役割や可能性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：10 kinds of experimental model of tools for visiting an exhibition were developed. Different evaluation methods were employed to assess these tools in cooperation with family group visitors. 8 kinds of finished tools were developed on the basis of the evaluation results. The process and evaluation in this research revealed these tools' important roles and capabilities in the interactions between visitors and exhibits, and among visitors.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	300,000	90,000	390,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：博物館学
科研費の分科・細目：博物館学
キーワード：博物館教育・展示見学補助ツール・ファミリーラーニング・コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

学校グループで来館する場合とファミリーグループで来館する場合で、子どもたちの博物館展示体験に大きな違いがあり、その影響は長期的に及ぶという研究結果がある。このような体験の違いを作り出す要因のひとつとして、コミュニケーションの質の違いがあると考えられる。学校グループでの来館では、教師やミュージアムスタッフが子ども一人一人と会話や対応をすることは不可能であり、展示見学補助ツールの一種であるワークシートを利用して見学する場合が多い。しかし、展示を見ずに、キャプションやパネルの情報を、ワークシートに書き写すという行為に陥りがちであるということが、頻繁に指摘されている。

一方、ファミリーグループで来館する場合は、親や保護者がその子どものレベルに合わせて十分に対応することが可能であり、普段の生活や子どもの趣味や興味といった私

的・個人的情報に関連付けて会話をすることができると考えられる。
　このことから、ファミリーグループでの来館において、コミュニケーションの質をさらに深めるためのきっかけ・媒体となる展示見学補助ツールがあれば、子どもたちの展示体験も豊かになり、将来的にリピーターとしてミュージアムに戻ってくるのではないかという仮説を立てた。

２．研究の目的
(1) 来館者間（ファミリーグループ）におけるコミュニケーションを活発に促し、博物館展示をより良く楽しみながら見学・観察するための手助けとなる展示見学補助ツールを、実践的に検証しながら開発する。

(2) さまざまな測定方法を用いる調査と開発過程から導き出される結果を総合的に分析し、展示見学補助ツールの有効性を明らかにすることを目的とする。

(3) さらに、本研究の成果が展示室における「人と人」、「人と展示物」とのコミュニケーションの相互作用についての理論的解明につながるとともに、実際の博物館運営の中で、広く利用されることを目標としている。

３．研究の方法
(1)国内外の展示見学補助ツールの先行例の分析調査
欧米と日本のミュージアムが実際に使用している展示見学補助ツールなどを分析し、ツール開発に活かせる情報を抽出する。

(2)来館者の意識調査
琵琶湖博物館の来館者（ファミリーグループ）に対して、聞き取り調査を実施する。その結果を分析し、展示見学補助ツールに対する利用者のニーズを把握する。

(3)展示見学補助ツールの試作版開発
上記１および２の調査から得られた結果をもとに、企画展「骨の記憶」で使用する展示見学補助ツールの試作版を制作する。

(4)展示見学補助ツール試作版の検証調査
企画展において来館者（ファミリーグループ）に試作版を使用してもらい、行動観察調査と聞き取り調査を実施する。その結果を分析し改善点等を把握する。

(5)展示見学補助ツールの改良および最終版の開発
上記４の調査から得られた結果をもとに、利用者の視点を活かした改良を行い、展示見学補助ツール最終版を制作する。

(6)展示見学補助ツール最終版の検証調査
企画展において来館者（ファミリーグループ）に最終版を使用してもらい、行動観察調査と聞き取り調査、アンケート調査を実施する。これらの調査結果を総合的に分析し、ツールの有効性や可能性について考察を進める。

(7)研究会の開催
本研究参加者および他館の学芸員、学識者等をメンバーとする研究会を継続的に開催し、全調査結果を共有するとともに、議論を重ねて理論の深化を図る。

(8)研究成果の共有
琵琶湖博物館にてシンポジウムを開催し、他のミュージアム関係者等と本研究成果を共有する。

４．研究成果

(1)2009 年度は、まず展示見学ツールに関する基礎的データを収集するために、ツールを使用しているミュージアムを視察し担当者から情報を集めるとともに、 学会等にも参加しさまざまな情報収集と意見交換をおこなった。さらに琵琶湖博物館企画展「骨の記憶」開催前に紹介展示を設置し、事前アンケートを実施した。これらの基礎的データを参考にして、企画展で使用する展示見学補助ツール「ホネホネキット」の試作版を企画開発した。

<u>貸し出し用かばんに入っているもの</u>
１）かさねシート（ペンギン・カエル）
２）クイズカード
３）指令カード
４）骨パズル
５）骨標本
６）観察シート（ワニ・イルカ）
７）骨Ｔシャツ
８）大人用ホネホネキット活用ガイド

<u>展示室内の机に設置したもの</u>
１）こすりだし（カエル・ウサギ）
２）骨バラバラカード
３）ヒト骨格パズル

　企画展の前半期間において試作版ツールを来館者(子ども連れのファミリーグループ)に利用してもらい、アンケート調査とインタビュー調査を実施し、使い勝手や各ツールにおける改善点等について検討した。大人と子

ども別々に調査を実施し、それぞれの意見や思いを拾い上げるようにした。

これにより、大人が子どもの利用状況を見て判断していることと、実際にその子どもが感じていることとの間に相違がある場合があることも判明した。特に、大人が子どもには難しいだろうと考えがちなことも、子どもにとってはその難しさが楽しさにつながっていることもあることが明らかになった。試作版における調査結果を元に改良した完成版ツールを企画展後半で導入し、大人と子ども別々にアンケート調査をおこない、ツールの有効性などについて検証を試みた。

(2) 2010 年度は、前年度の調査結果から得られたデータの入力・分析作業を進めた。

また、本研究参加者、他館の学芸員、ツール製作者などと研究会を開催し、他館の実践を視察するとともに研究過程で明らかになってきた課題などについて議論を重ねた。特にツールを製作する上で、予算や人材が限られている中で、どのように技術的な課題を克服するかという点について、他館の実践事例における創意工夫点などを参考にすることができた。ツールの利用対象者に関わる人々、例えば学校教員や幼児教育に携わっている人々などを、できるだけ早い時期から開発メンバーに迎えて、それぞれの対象年齢者層の心理的、行動学的な特徴を視野に入れてツールの開発を進めることが、より楽しく利用しやすいツールの製作につながるということがわかった。

さらに館の学芸員や研究者が積極的に参加し、ツールの活用を通じてどのようなことを伝えたいのかということを明確にし、それらが伝わるような工夫を凝らした製作をすることが、単なる手で触れられるものではなく、きちんとした教育教材として成り立つことにつながることがわかった。

(3)2011 年度は、コミュニケーションツール研究会を琵琶湖博物館で 2012 年 1 月 15 日（日）と 16 日（月）の 2 日間に渡り開催し、50 名近くの参加者を得た。研究成果を共有するとともに、参加者が所属する各館におけるツール類についても情報共有を図った。そしてこれらの内容をまとめた報告書を作成し、これを各地の博物館関係者に配布することでさらなる情報共有とネットワーク化を図った。

まとめの研究会を開催したことで、展示見学補助ツールの製作や運営について、各館の担当者が日々悩みながら実践を続けていること、また、このような研究会やネットワークが過去になかったため、相談することも難しいという実態が明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 黒岩啓子、ファミリーグループの展示観覧体験を支援する見学補助ツール、コミュニケーションツール研究会報告書「展示室におけるコミュニケーションと学び」、査読無、2012、14－25
② 黒岩啓子・布谷知夫、展示観覧と学びを促進する展示見学補助ツール開発、日本展示学会誌、査読無、49 号、2011、138－139

〔学会発表〕（計 5 件）

① 黒岩啓子、ファミリーグループの展示観覧体験を支援する見学補助ツール、コミュニケーションツール研究会、2012 年 1 月 15 日、滋賀県立琵琶湖博物館
② 黒岩啓子・布谷知夫、展示観覧と学びを促進する展示見学補助ツール開発、日本展示学会第 30 回研究大会、2011 年 6 月 18 日、南山大学名古屋キャンパス
③ 黒岩啓子、段階別評価の活用に関する一考察、全日本博物館学会第 37 回研究大会、2011 年 6 月 12 日、明治大学
④ 黒岩啓子、展示企画過程と展示見学補助ツールの開発のあり方について、滋賀県立琵琶湖博物館研究セミナー、2010 年 11 月 19 日、滋賀県立琵琶湖博物館
⑤ 黒岩啓子、企画展「骨の記憶」展示見学補助ツールの企画と開発過程、関西博物館研究会、2009 年 10 月 20 日、滋賀県立琵琶湖博物館

〔図書〕（計 1 件）

① 黒岩啓子（編）、展示室におけるコミュニケーションと学び、コミュニケーションツール研究会、2012、91

６．研究組織

(1)研究代表者
黒岩　啓子（KEIKO KUROIWA）
滋賀県立琵琶湖博物館　特別研究員
研究者番号：70470185

(2)研究分担者
布谷　知夫（TOMOO NUNOTANI）
滋賀県立琵琶湖博物館　特別研究員

研究者番号：70110038

(3)連携研究者
高橋　啓一（KEIICHI TAKAHASHI）
滋賀県立琵琶湖博物館　総括学芸員
研究者番号：50139309